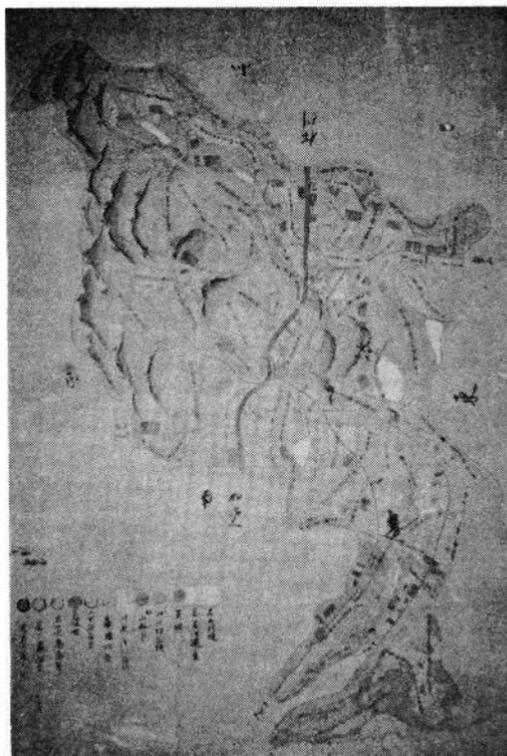


第七部

溝辺とむかし



溝辺町古地図 (年代不詳)

第一章 地名についての一考察

日本考古学協会会員・日本地名研究所研究員である平田信芳氏による「大隅国府はどこか」という記事が南日本新聞に掲載された(昭和五十七年十二月三十日「溝部と溝辺」、三十一日「地名表記の変化」)。それによれ

ば

大隅国設置の翌年にあたる和銅七年(七一四)、隼人を教尊するために豊前国(大分県)の人々二〇〇戸が大隅国に移住させられたことは史料적으로よく知られていたことなのだが、その実体は未解明のままであった。豊前国の溝部と大隅国の溝部は、『統日本紀』記載の記事を思い浮かべて、はじめて結びつく。すなわち、溝部(溝辺)は、豊前国からの移住によって移動して来た地名と考えてよいのである。

平安時代、今日の溝辺町の境域は大隅国桑原郡桑西郷に所属していた。桑原郡の大領(郡の長官)に酒井勝すかつとむという人物がいたが、この人物は元来豊前国宇佐八幡の神官で、その子孫が大隅国に土着して西郷氏、溝部氏、酒井氏となったといわれる。平安末期の土地台帳である「大隅国函田帳」には、加治木郷宮永崎守(今日の溝辺町崎森)の領主は酒井為宗、桑西郷溝部在河(今日の溝

辺町有川)の領主は酒井末能と、酒井一族の名が記されている。また南北朝時代には、溝辺孫太郎なる人物が溝辺城に居城したと『島津国史』は記している。このように、古代末から中世を通じて、豊前国出身の酒井勝の子孫が溝部(溝辺)を支配していたのであるから、豊前国の溝部という地名が大隅国に、もちこまれてきたとみなしてよい。

豊前国の溝部は耶馬溪の奥にあたる山里であり、金を産出した土地でもあるので、大隅国の溝部(溝辺)でも金などの鉱物資源を探し求めるために、山深い里にその昔住みついたのかも知れない。あるいは「溝部」という特殊技能をもった集団が、大隅国開発のために派遣されたのかも知れない。それはともかくとしても、溝辺の地および韓国宇豆峯神社の所在地が、大隅国府防衛のための要地であったことは推定できる。

溝辺町は麓^{ふもと}・有川^{ありがわ}・竹子^{たかこ}・三縄^{みなね}・崎森^{さきもり}の五大字から成っている。これは近世では麓村(または溝辺村)・有川村・竹子村・三縄村・崎森村とよばれていた。これらをさらに平安末から鎌倉時代にまでさかのぼらせると、溝部村(溝部本村)・在河村・竹師村・皆尾村・崎守村と

いうことになる。

このように地名表記の仕方が異なるのはなぜかとの素朴な疑問を感じたので、これらの地名表記が史料上に現れるのは、いつが最初で、またいつが最終になるかを整理してみた。

溝部という地名が史料の上に初めて見えるのは建久八年(一一九七)、その終見は元徳元年(一一三九)であり、溝辺という表記が初めて史料に登場するのは嘉吉二年(一四四二)である。一三二九年から一四四二年の間に地名の表し方が溝部から溝辺に変わったとみることができる。また、元久二年(一一二〇五)の史料に「溝部本村」という表現があるが、この本村が後世の溝辺郷麓村に変わったものと見当がつく。一般に麓とよばれる集落は、薩摩藩の外城制度にもとづくものとされているが、その母体となるものは、すでに中世において成立していたことが溝部本村の例から想像できる。

在河という地名の初見は建久八年(一一九七)、その終見は永仁二年(一二九四)。有川の初見は天正十三年(一五八五)。したがって二二九四年から一五八五年の間に、その表記が変わったことになる。

竹師の初見は建治二年（一二七六）、その終わりは資料不足で不明。竹子の初見は応永二十年（一四一三）。竹師から竹子への変化は一四一二年以前になる。

皆尾みなおの初見は天養二年（一一四五）、その終見は永享三年（一二三二）。三繩という地名表現がいつ登場するか史料上未確認であるが、上記の三村（溝辺・有川・竹子）と大きく隔たるものではあるまい。崎守の初見は、溝辺の地名では最も古く、保延元年（一一三五）、その終見は永享三年（一二三二）。崎森の初見は文祿四年（一五九五）。一四三一年から一五九五年の間に、崎守から崎森への変化があったことになる。

以上ながめたところから、溝辺五村（五つの大字）の地名の表し方は、大体のところ、一五世紀に変わっていったの見当がつく。そこで、一五世紀にこの地域で一体なにが起り、地名表記を変えることになった理由はなにかが、一つの問題として浮かびあがる。その解答を導きだすために、溝辺における支配者の変遷を年次を追って並べてみた。

▽建久八年（一一九七） 崎守・在河の地名初見、崎守の領主は酒井為宗、在河の領主は酒井末能

▽元弘のころ（一四世紀） 溝辺孫太郎が溝辺城に居城

▽延文三年（一三五八） 島津氏久の執事本田信濃守

重親が守る溝辺城を畠山直頭の軍勢が取り囲む。

▽文明十八年（一四八六） 肝付兼固、日向国大崎城

より移封、溝辺城主となる。以後肝付氏が代々溝辺

郷を支配

さて、溝辺五村の地名表記の変化を前記の年表的整理と比較すると、溝辺の支配者が国衙勢力こくが（国衙領は古代末期から中世を通じて国家が直接支配した領域。勢力とは国衙領を治める役人の勢力）と結びついた酒井一族から、島津氏の執事であった本田氏に変わったところに、地名の表現が変えられていると理解できる。

溝部から溝辺といったような、わずかな地名表現の変化の中に、国衙勢力の衰退と守護勢力の浸透という歴史の変動の結果が内蔵されていたのである。江戸から東京への変化は、激しい変化であるのでだれでも気づくが、溝部と溝辺のようなわずかな変化でも、その中には意外な歴史事実が秘められていることを、あらためて認識させられた。地名には、そのように表現することもあった

程度で片付けられない問題が内包されており、地名こそはまさに歴史の化石とみなしてよい。

なお、豊前国溝部のほかに伊予国（愛媛県）温泉郡にみぞのべ溝辺、備前国（岡山県）御津郡に溝部の地名がある。これらの溝辺・溝部を比較してはじめて「みぞべ」という地名の本来の意味が姿を現すのであろう。以上の説は昭和五十八年発行『角川日本地名大辞典』の「地名編」にも一部掲載され、さらに「地誌編」中世の項の地名についても同趣旨の記述がある。『溝辺町郷土誌（初版）』の中世、近世の時代の変遷については詳しく記述されているので、本項は主として地名の一考察とした。

第二章 溝辺のむかし

一 方 言

言葉はその土地をつくるという。いや、土地が言葉をつくるのかも知れない。溝辺に残る鹿兒島語を、すたれゆく純粹の鹿兒島弁を、いくらかでも書き残すという意味で、とり上げてみることにした。

現在、小学校・中学校でも、地域の中でも、半分は標準語になっている。年配の人でさえも、標準語で話して、それほど奇異な感じをもたなくなった。昔は「他所語を言う」といって、それこそ、生意気な「いや」「ヨカバシ（良かぶって）」と爪はじきされたものである。

〔溝辺地方で使われたおもな方言〕

◇名詞・代名詞など

にせ（二歳＝青年のこと）

おご（未婚の娘、少女）よかおご（妙齡の娘さん）

ちご（男の子、少年）

おせんし（大人衆）

あんさん（兄様）

あによ（兄）誰々あによ（先輩に親しさを表して言う

場合の呼び名）

おとっちゃん、おやっさん（父親）

おっかはん、おっかん（母親）

とのじょ（男主人）

おかた、うっかた（妻、家内）

きよで（兄弟）

おとっ（弟）

いもっ（妹）

しったれ（末っ子）

まっぼい（専有）

まっぼし（的の中）

でかん（下男）

めろ（女中）

おまんさあ（お前さま）目上の人に対しての呼びかけ

おはん（お前、お半さま）目下の人または同僚

あのさあ（目上の人へ代名詞）

あい (目下の者への代名詞)

おい (自分のこと) 目下に対して

わい (お前) 目下に対して

わや (汝は) 目下に対して

わいどま (汝らは) 目下に対して

ぼっけもん (冒険者、大胆者)

めんどん (おぼけ)

おどもん (横道者、横着者)

われこっぼ (腕白者)

やっせんぼ (弱虫、役立たず者)

ふゆしごろ (なまけ者)

やんめごろ (病人)

えじわろ (自分の利だけ考える者)

こえぶっちょ (肥満体)

やせぎっ (やせた人)

ぢっくい (背の低い人)

いやしごろ (食いしんぼ)

くわんじん (こじぎ)

たんごどん (おけ職人)

ゆるい (いりり)

ゆしどこい (便所) 「ゆし」とは用事

せどや (背戸の戸外)

すんくじら (隅っこ)

いがわ (井戸)

たいよさあ (神官)

たんご (おけ) こえたんご (肥料おけ)

たかんばっちょ (竹皮笠)

づてかっ (自在かぎ)

さしげた (高げた)

しょけ (竹のざる)

てもと (箸)

はんず (水がめ)

はがま (羽釜)

ずし (雑炊)

ちきい (秤)

しよどく (道具) 諸道具のこと

くろちよか (黒い焼酎わかし)

ちやちよか (急須)

さんげし(竹馬)

しね(竹刀)

ほじょ(毛虫)

へごやぼ(うらじろのやぶ)

がし(軽石)

ぼい(とんぼ)

きらし(おから)

いとうい(ヘチマ)

とっさご(ホウセンカ)

すばべん(口べに)

びんた(頭)

ごじゅんけ(結婚式)

さだっ(夕立)

なえ(地震、中風)

ながし(梅雨)

わやく(冗談、いたずら)

よんごもん(横車を押す人)

つぶっ(深い水たまり)

なんこ(箸戦のあそび)

えさつ(あいさつ)

ぐわんたれ(悪い品)

やまいもほい(酔ってくだをまく人)

むけづら(むこうづら)

むかずね(むこうずね)

◇助詞・動詞など

あつたらしい

(惜しい)

あれやっめ

(食後の洗いもの)

いけんすんな

(どうするな)

いっもはん

(いきません)

いっかすっ

(言ってきかす)

うぜらし

(うるさい)

うったくっ

(なぐる)

いけしてん

(どうしても)

えじど

(ずるいぞ)

おやっとさあ

(おつかれさま)

おぎら

(自慢、ほら)

かかんな

(さわるな)

かたげる

(肩にかつぐ)

がった

(叱った)

がっつい

(合対、ちょうど)

かんじやく

(節約)

きっさね

(きたない)

ぎをゆな

(生意氣を言うな)

ぐらしこっ

(かわいそうなこと)

ぐるい

(周囲、まわり)

くれたくっ

(大声で叱ること)

げざらし

(下品な)

けなつた

(こうなつた)

げんね

(きまりが悪い、恥ずかしい)

こすわい

(くすぐつたい)

こぼめ

(かたづけける)

こいぎい

(これ限り)

ごろいと

(とうとう)

ごあんど

(ですよ)

こさつのくつ

(押しのける)

ことっ

(家に声をかけること)

されっせえ

(歩いて)

すつたい

(大変に)

しつちよいかぶつ

(知つたかぶりをする)

せからし

(さわがしい、うるさい)

そがらし

(たくさん)

そいちやっど

(そうですよ)

たもんせ

(ください)

ただいまんこめ

(今すぐ)

たっきのこめ

(早く)「太刀の来ぬまに」の語源

だつもんね

(らちもない、だらしない)

ちよっしもた

(仕舞つた)

ぢく

(きょうな)

ちんちん

(少しずつ)

づもね

(とほうもない)

つがあんね

(とてつもない)

てんご

(なぐさみに、本気でないこと)

でがね

(物が少なく、長持ちしない)

とぜんね

(さびしい)

どしこでん

(いくらでも)

ないごて

(どうして、なぜ)

ないどこいじゃなか

(他を思ふ余裕がない)

ないもはん

(なりません)

なんかくつ

(立てかける、なげかけること)

にぎい

(けちんぼ)

にはんがまし
(はっきりしない、二つに判じが
たい)

ぬくんせー
(火にあたる、あたたまる)

ねんじゅさんじゅ
(一年中、いつもいつも)

のんかた
(さかもり)

のさん
(困る)

はめっくい
(精出す)

はいと
(いつも、常に)

はしと
(しっかりと)

ばこな
(奪いあうな)

はらけた
(腹を立てる)

ばたぐるっ
(のたうつ、ばたばたして狂
う)

はらぐれ
(冗談)

ひえくせ
(生臭い)

ひっちゃれた
(落ちた)

ひったまがった
(びっくりした)

ふけんね
(とんでもない)

ふっきやつめ
(ふきそうじ)

ふがよか
(運がよい)

ほんのこて
(ほんとうに)

ぼっけ
(ものにおじない)

ほろいとなっ
(やつれる)

まねけんな
(たまには、時には)

まぐれっ
(道に迷う)

まぜくつな
(かきまわすな)

みとんね
(見苦しい)

むぞか
(かわいい)

むくろいき
(猛烈に)

むいねこっ
(むごいこと)

めいやげもそ
(訪問のことば「参り上げ申
そ」)

もっしよい
(強く、もうれつに)

やじよろし
(やかましい、うるさい)

やんかぶい
(ひげや髪がのびて乱れてい
る)

よいなこて
(やっこのことで)

よしゅごわした
(よかったです)

よんごひんご
(ゆがんでいる)

わっぜか
(大変に、非常に)

んだもしたん

(あらまあ、知らんこつ)

あらいよー

(びっくりした) 同情を示すと

きの感嘆詞

単語の組み合わせによっては、いろいろニュアンスの違った言葉にもなる。またその時その時の状況によって特殊な用語もある。すたれゆく方言、敬語、尊敬語などまだまだ足りないものも多いので、今後も調査を続けてゆきたいと思う。

二 ことわざ

溝辺の風土の中から生まれた俚言、ことわざなどを収録して残したいという願いから、本町の長寿大学の皆さんの協力を得て、集めたものである。どのように時代の移り変わりがあっても、こうした「ことわざ」の真理は変わらない。しかし短い言葉で、豊富な内容を盛り、わかりやすく、かつユーモラスに伝えることができるのが、俚言の特徴である。

ことわざは、溝辺独自のものではないにしても、およ

そ、薩摩・大隅の風土から生活の知恵として生まれた、地方の風俗を表したものと考えられる。したがって、その代表的なもののみを、次のように分類して取り上げた。(ただし初版で取り上げたものについては、その類型をも含めて省略した)

- ① 天気・時象などに関するもの
- ② 縁談・縁組などについたもの
- ③ 青少年、社会の教育に関するもの
- ④ 家庭生活に関するもの
- ⑤ 社会一般に関するもの

1 天候・時象に関するもの

・霧島ん雲ん土手

きりしま山系に雲の土手ができると、台風の前ぶれといわれる。

・くしっ鳥が鳴つときゃ雨

くしっ鳥(日向カケス)が鳴き騒ぐときは、雨の前ぶれという。

・木の葉が光る時は雨

木の葉が、きらきら光って見える時は、雨の前ぶれという。

・東風は雨まえ

東風が吹き出すと雨になる。

・嘉例川ん汽車ん音は雨

溝辺地区では、かれない川駅方面の汽車の音が、よ

く聞こえるときは雨となる（東風）

・丹生附ん山に立った夕立きたちや竹子に来っ

丹生附方面の夕立は必ず竹子方面に雨を降らせる

るという。

・竹子鹿倉い立った雨と木戸口の乞食は来外しやせん

三縄地区の人たちの天気予報

・秋の夕焼け鎌を磨げ

夕焼けは明日天氣がよくなる。鎌をといで刈入れ

の準備をしなさい。

・暑さ寒さも彼岸まで

暑さ、寒さの氣候基準は彼岸である。

2 縁談、縁組に関するもの

・嫁めは小屋ん隅から

嫁もらいは、あまり高望みするな。小屋の中で育

つたような娘が一番しっかり者で世帯持ちがよい

ですよ。

・小糠一升あれば養子にゆくな

むかしの養子入りのきびしさをいう。養父、養母

ひいては妻にまで、一生頭があがらない例が多か

つた。

・わが面も鏡に映せ

自分の能力やふうさいを考えて、相手に対する批

判もしなさい。

・女子おなごと繩三尺売れん事なし

・端繩おなごと女子おなごに余いもんなし

嫁さんにもらい手がないと余り心配しなくてもよ

い。必ず良縁がありますよ。

・以合た鍋なべん蓋ぶた

なべのふたは大きすぎても、小さすぎても具合い

が悪いもの。結婚も男女似合いがよろしい。

・嫁もろなら親もろえ

嫁をもらうなら親をみてもらえばまちがいがない

との意。子は親に似るから。

・提灯ちようちんもち（下駄もち）

嫁さんもらいなどの加勢をする人のことをいう。

また他人の手先になり宣伝や先走りすることをい

3 青少年、教育に関するもの

・子供な風ん子

子どもは、寒さにも暑さにも負けず、屋外で風の

子のように元気に活動しなさい。

・泣き虫蜂

ふんだり、けったりの状態。弱虫の代名詞。

・分限者ん子にや魚

貧乏人の子にや餅を炙らせ

魚を焼くときは余りいじると崩れる。そこで金持

ちの子は、腹がすいていないから余りいじらない

からよい。もちは、たびたび、ひっくり返してみ

ぶらないとこげるので、お腹のすいた貧乏人の子

がよい。

・親へ似た亀ん子

子どもは、自然と親に似るようになる。

・可愛子にや旅をさせ

かわいい子どもほど、よそに旅をさせて、修業を

させなさい。

・負けたが勝ち勝ち

・武田信玄逃げたが勝ち勝ち

負けることも退くことも、必要なときもあり、ま

た真の勇気につながることもある。状況判断を誤

るな（武田信玄の戦き上手をいうのであろうか）。

・かからん蜂や刺さん

いらぬお節介はやめなさい。子供のころ、いらぬ

ちよっかいをして間違いや問題を起こすと、よく

親にいわれたことばである。

・さわらぬ神に祟りなし

・君子危うきに近よらず

前句に同じ意味であろう。

・親下男、子旦那、孫乞食

親の代は下男のように難儀苦勞して財産を蓄えて

きたが、子どもの代には親の苦勞を知らず散財す

る。孫の代には、すべてを失ってこじきとなる。

昔はこのようなことが多く、戒めのことわざによ

く使われた。

・大取りよっか小取り

一獲千金を夢みるよりは、律気に少しずつでも積

み上げる方が間違いがなくてよい。

・彼岸すぎの肥料と二十歳^{はた}から意見は効かん

鉄は熱いうちに打てという。人間も二十歳くらいまでにしっかりしつけなければ、時期はずれの肥料と同じように効果がない。

・三つ児ん魂^{たまご}しゃ百づい

人間三歳までに魂はおおむね育つ。心して幼児教育につとめなさい。

・親の意見となすびの花は千に一つの仇^{あだ}もない

ナスの花は全部実を結ぶという。親の意見もナスの花のように仇がない。愛情あればこそその意見である。素直に聞くものだ。

・男牛^{こつてし}や死んでん前ん田は荒れん

家庭の中心である親父が亡くなっても、田んぼは荒れない。後に残った者たち、気を落とさずに頑張るなさい。不幸に対する励ましの言葉に使われた。

・「チエストイケ!!」

むかしから薩摩の気合い語として貴ばれた。勇気や闘争心をかきたてる掛け声でもある。

・小鳥^{しとと}の肝^{てつち}(小鳥の肝)

小心者の代名詞で、一番小さい小鳥の肝に例えて子どもたちを指導した。

・早くそ早めし

用便も、食事も速くやれの意。いつ敵に襲われるかも知れないから早い行動が必要。青少年や軍隊ではこのように教育されたものである。

・お茶と情けは濃い濃いと

お茶も人情も濃いほどよろしい。特に若い娘たちの教えに使われた。

・若け時^{わがとき}の難儀は買^かいでんせ

若いうちの難儀苦勞は、さきざき一生の尊い人生教訓である。お金を出して買ってでも修業を積みなさい。

・穴ほらんねずんなおらん

ネズミは、自分の体に合った穴を掘って生活する。どんな人間でも、それなりに生計を立て、暮らしていくものだ。取越し苦勞はやめて、子供には子供の行き方をみとめてやるのも、大切なことではないですか。

4 家庭生活に関するもの

・嫁の姑しゅうとない

嫁は姑にだんだん似てくる。またやがては姑になるものである。よろしく指導して仲良くくらしなさい。

・似た者夫婦

似通った性格の夫婦。

・七斤しちきんと七斤ななきん

五分五分の人たちだ。

・嫁めはとっじい

むかしの嫁さんの処遇はきびしかった。いろいろの末座（とっじい）に座らせられて、火当たりも悪く、炊事雑用の承りどころでもあった。

・夫婦おんじよんぼげんかは犬も食わん

夫婦げんかのつまらなさは大食いの大でさえも、よりつかないほど、いやなことである。

・物種は盗んでも子種は盗んな

女性に対する不義のいましめ。同時に年経るごとに証拠が歴然として顔、形が似てきますよ。

・男は度胸、女は愛嬌あいきょう

「きょう」の語呂あわせから来ているもので、男は物事に恐れぬ気力をもて、女は愛想よく人に好

かれることが一番大切ですよ。

・燃えんでん火のとっ

一家の主人（家長）の重要さを説いたもの。むかし、いろいろには火種用の大きな堅木の丸太（火のとっ）がくべられて、それを中心に家族のだんらの暖かい火が燃えたものである。

・板敷いたしき払れ

祝いごとなどが済んだ後、手伝いの人や身内の者だけで後さらえや、しめくりをすることをいう。

・大釜うがまん飯に小鍋ん汁

ご飯は大きな釜で炊いたものがおいしい。汁は小さな鍋で小味よくつくったものがよい。

・米ん飯魚いーぶ

米のご飯に、魚のおかずがあれば上等のごちそうであった。「ぶ」は魚のことである。むかしは、みんなが、このような献立を願望したものである。

・鳥からすの水浴みづあびい

入浴の時間が非常に早い人のことをいう。

・盃ちよっ米

むかしは、毎日杯一杯の米をます升からすくいと
 って蓄え、いざというときに備えた。台所をあず
 かる母親が実行したものである。「ちりも積もれ
 ば山となる」と同意。

・折目節句

正月、三月、五月の節句、お盆、お彼岸などのけ
 じめの祭祀のことをいう。これらの行事で親子、
 親類が集まり、それぞれの礼を尽くし、一族の平
 和を願ってきたものである。

・仕事ちや大釜で飯しや小皿

大いに働いて、充分辛抱しなさいの意。

・仕事はいっさせ、言うこた明日言え

仕事にかかるのは明日にのばさずすぐかかりなさ
 い。文句や不平は考えてから明日いいなさい。こ
 とばは慎重にこしたことはない。

・嗜ん足し呉れ

物惜しみもほどほどにしないと、かえって高くつ
 きますよ。くれるべきものは思いきってくれなさ
 い。

・馬鹿ん大食れ

・腹八分に医者いらす

いずれも食事健康法を教えたもの。腹一ぱい食べ
 ることは、健康のためによくないとの戒め。

5 社会一般に関するもの

・後悔と弔は後から

・転ばん先の杖

後になってから悔いないように戒めの言葉として
 よく使われる。

・当てと禪や前から外れる

男のふんどしが使われなくなった現在、死語に等
 しいものになったが、「後悔と弔は後から」と対
 照的な言葉遊びの俚言として面白い効用を果たし
 ている。

ふんどしは前から外れるし、当てにしているもの
 は先方の考えによって外れて、当てにならない場
 合が多い。心づもりにする当てほど、頼みになら
 ないものはない。

・仏の面も三度ぎり

仏のような人でも、あんまり度のすぎたことをす
 ると、しまいには怒りますよ。

・甘かもん食うて油断するな

甘い話のうらには、きつと何かある。用心用心。

・馬鹿ん一つ覚え

同じことをいつも言ったり、同じようなことをしているのとバカにされる。

・馬鹿と鉄は使いよう

バカも、はさみもうまく使えば立派に役立つものである。

・糠に釘

・のれんにうでおし

・猫に小判

・馬ん耳に念仏

いづれも、いくら教え、力んでも効果のないことをいう。

・出い釘や打たるつ

でしゃばりもほどほどにしなさい。過ぎると頭をたたかれますよ。

・年寄と金釘は引込んだうえはなか

・子供と味噌麴は寝ったほどよか

分相応にと言う年寄りの出しゃばりを戒めた言

葉。

・老人ん帽子尋ね

探しものをする時は身辺をしつかりと確認してからにしなさい。笑われますよ。「もうろくは笑止なり」。

・急ぎ蟹穴入らず

あんまりあわてるといけません。横ばいのカニは、自分の穴の入り口をふさいで入れなくなりますよ。

・やせ馬ん先走り

やせ馬は最初は元気よく先頭を突っ走るが、後が続かない。自分の力であわてず騒がず、最後までやりぬきなさい。

・団子餅よか気持

・志しゃ蕪ん葉

つきあいごとは真心が一番大切。ちょっとした心掛けが人の心を温かくする。

・馬子にも衣装

だれでも外形を飾れば立派に見かけはよくなる。中身も立派でありたいもの。

・油虫あまめを亀虫かめが笑つ

どちらもきらわれものの臭い虫。自分のことは棚に上げて相手を悪く言うたとえ。

・七ツ刻どきからん逃げくそ

怠け者の戒め。七ツ刻（午後四時）ごろになると、便所に行くといつて仕事を逃げる人のたとえ。

・丸い卵も切りよじゃ四角、ものも言いよじゃ角がたつ
人間性は丸くありたいもの。ものをいうときも、相手の気持ちをくんで親切にしたい。

・踊り見い馬鹿に相撲とり馬鹿

踊りはみんなといっしょに踊る方がたのしい。相撲は、見物する方がよいとの意味。

・バチ教が多か

おしゃべりの強い人のことを三味線のバチに例えたもの。

・枝がなか

面白みのない庭木・盆栽のことで、すべてのことに変わりばえのしないこと。

・世間の口にヤ戸は立てられん

世の中のうわさは止めることはできない。

・悪事千里を走る

悪いうわさは早く伝わる。

・音が悪り

口づてに伝わる人のうわさのこと。昔は情報伝達の機関がなく、人づてに言葉で伝ったので、「音づれ」として悪いうわさが伝わることを「音がわるい」と言った。

・人のうわさも七十五日

人のうわさも、日時がたつと、だんだん忘れられる。

・魂たましゃ使どり得、煙草とんこ入こちや下どげ道具

人の頭は使うほど得になる。タバコ入れは腰に下げなさい。「得」と、「道具」のかけ言葉として面白い。

・瓜うりん蔓づるにや、なすびはならぬ

物にはそれぞれ目的があつて作られているもの。ナスビが欲しければ、ちゃんとナスを植えなさい。

・吊でんい大根こん、こがれ

宴席で最後まで居すわる人のことを言う。煮しめの中の干し大根は、余り好まれないので最後まで

残る。また、こがれ（焦げ飯）も、かまの底について残るから、この言葉が出たものと思われる。

・山芋掘い

酒くせの悪い人の代名詞。特に飲んでから人に文句を言ったり、けんかを仕掛けるような人进行う。

・桃栗三年柿八年、梅の馬鹿野十三年

実のなる基準年数で、梅は年数を経てからが本ものになること。

・木もと竹うら

木を割るときは根元の方から、竹を割るときは、末の方からがよい。

・桜切い馬鹿、梅切らん馬鹿

桜は枝を切らずに育てた方がよいが、梅は時期を見て剪定した方が実も多く、育ちもよい。

・下手の長糸

縫いものの下手な人は針糸を長くつけるが、上手な人は短くとして、むだのない縫い方をする。

・黙いの大好き

人は見かけによらぬもの、おとなしそうで案外や

るものである。見かけによらぬ好色家の代名詞。

・手八丁口八丁

しゃべることも、することも大変達者な人のことを言う。

・股ばいの膏薬

自分にしっかりした主義や考えがなく、あっちにいたり、こっちにいたりする人を、あざけることば。

三 郷土の童歌と遊び

日本の、乃木さんが、凱旋す

すずめ、めじろ、ロシヤ、野蛮国、

クロバトキン、金の玉

負けて逃げるはチャンチャンボ

棒で打つのは犬ころし、

シベリヤ鉄道長がいとど

どびんの口からホケ出せば

婆さんの顔は四八、三十二

と「日本の乃木さん……」に返る言葉遊びがある。このような尻取り歌は、子供たちにとって、なおざりにできない遊び言葉である。階名唱反復（ドレミファソ、ドレミファソ、）は子供の心に音階を定着させるが、尻取り遊びは「語呂」を定着させる。尻取り歌は多く巡回式になっていて、いつまでも続けられるようになっていく。

尻取り言葉はまた大人の民謡にも利用され、単調な労働歌などでうたわれていたものである。日本語の最大の利点を活用した技法であり、同時に時代相をうつしている。明治の日清・日露の戦役や、大陸進出の思想が童歌の中にも、ほのかにのぞかれる思いがする。

〔縄とび遊び〕

へ郵便さん、早よ、走やい

モツツイ モツツイ 十二時じゃつ

一時、二時、三時、四時、

五時、六時、七時、八時、

九時、十時、十一時、十二時、

電信 電話 電報

「十二時じゃつ」のところまでは横ゆり、

一時〜十二時まで飛び縄を回すし、だんだん早く回す。最後まで、残って飛んだものが、勝者となる。

へ大波、小波で

まわして、 まわして

ストップ ポン

（縄を横ふり）
（くるくる回す）
（最後に縄をまたぐ）

この場合、大ぜいで飛ぶ場合はこの歌のあと、
一、二、三、……十二まで飛ぶ。

〔手合わせ歌〕

へ一かけ、二かけ、三かけて

四かけ、五かけて、橋かけて

橋のらんかん腰をかけ

はるか向うをながむれば

十七、八の姉さんが

片手に花と線香もち

もし、もし姉さんどこへ行く

わたしは、九州

鹿児島

西郷隆盛のむすめです

明治十年、戦役に
（指で数をかぞえる）

切腹なされた父上の

(切腹のまね)

お墓参りにまいります

(セツセツセー)

おはかの前で手を合わせ

(合掌)

なむあみたぶつ

(両手をすり合わせる)

ジャンケンポン

(ジャンケンをする)

最後に、一回まわって、背中におんぶして終わり。

セツセツセ

ひつと ふった チョージョ

青山御所から、赤い鳥が、三つ みつ

十をで 二十

青い鳥が、三つみつ

二十で 三十

そのうち 袴はかま はいて、ズツ ベラ、ベラ、ベラス

三十で 四十……

ッ ポン ポン ジャンケンポン

(ずっと百まで数えて、お手玉をとる。百まで

〔お手玉遊び〕

数えたらまた十にもどる。)

オサーライ

二つの手玉を、交互に肩より上まで上げる。三つ

おひとつ おひとつ おろして オーサライ

の玉を遊ぶ場合もある。途中で高く上げて、下の

おふたつ おふたつ おろして オーサライ

手で玉を切る。長じてはそんな技術も修得さして

おてのせ おてのせ おろして オーサライ

くれるのである。

おつかみ おつかみ おろして オーサライ

大黒さんという人は

おちりんこ、おちりんこ、おろして オーサライ

そのかみの 人なれば

おてんぶし、おてんぶし、おろして オーサライ

一じゃ たーらほうまいで

おんばさみ、おんばさみおろして オーサライ

二じゃ っこり笑って

三じゃ 酒屋の番頭さん

四じゃ しかいのめーでを

五で ごろごろ大砲が

六じゃ ロンヤの大將が

七つ 波から渡った浦島さん

八つ 山をはいのぼり

九つ こうさんしたけれど
(屋島の戦で)

十で とうとうほろぼした

子どもたちが、気ままに歌って、お手玉をとって遊ぶ歌詞である。意味の通らない歌詞もあるが、思いついてみても、なぜそう歌ったのか、それも分からないと言う。それが童歌として残るところが、またなつかしくて面白いのかも知れない。

〔手まり歌〕

みいちゃん みやんな

みで みいちゃん

一つこいよ

ひでこで 一つこいよ——

まりをつきながらうたい、「一つこいよ」で背中にまりを背負う仕草をする。

てん てん てまりの音の数

ひい ふう みいつ よつ いつつ

六つと数えて、七つになれば

わたしは じんじょう一年生

一番はじめは 一の宮

二で 日光東照宮

三また 佐倉の宗五郎

四では 信濃の善光寺

五つで 出雲の大やしろ

六つ 村々鎮守様

七つは 成田の不動様

八つ 八幡の八幡宮

九つ 高野の高野山

十で 東京の明治神宮

青葉しげちゃん 昨日は

いろいろお世話に なりました

私はこんどの 日曜日

東京の学校に 参ります

あなたも よくよく勉強を

なされてください たのみます

「青葉茂れる桜井の」(落合直文作詞)の替え歌で、まりをつきながら、「昨日は」「なりました」

「日曜日」で股をくぐらせる。

「一もんめの一助さん 一の字がきらいで

一万一千一百石 一斗 一斗まで

お倉におさめて 二もんめに渡した ホーランセ

〔羽根つき歌、風船打ち〕

「ひとよに、ふたよ

みよに、 四四に

いつさし、むさし

なんの やくし

九ばした とーばした

越中さん(富山の薬屋のこと)は薬の入れ替えにきて、四角な紙風船を子供たちにくれたものである。「フッ」と頬をふくらませて息を吹き入れると、四角の紙風船がふくらんで赤い模様の風船が子供たちの夢を果てしなく飛ばしてくれた。

〔からかい歌〕

誰さんの頭に

「誰かさんの頭に

秀が 立った

医者どんに 診せたや むしぶくろ

こっそり「誰かさん」の頭の上にワラくずなどをのせて、素知らぬ顔で、はやし立てる。他人ごとだと思つて、いい気になつてはやし立てている人の頭に、知らぬ間に木の葉がのつている。それをまたはやす。こんな他愛もない遊びの中に、ユ

「モアや、諷刺の心が育つのである。」

「男と女と まめくじら

「男女七歳にして席を同じうせず」郷中教育の質実剛健の気風の中で、男と女が仲良く遊ぶことは、あまり好ましいことではなかったのである。男女がまじつて遊んだり、仲良く連れ立ったりすると、悪童連はこの歌をうたつてはやし立て、けなしたものである。

ゆうどがびんた

「言うど ゆーど

ゆうどが 頭は禿げびんた

まちつとはげれば むかしのさむらい

告げ口野郎に応酬する「からかい歌」である。「先生に言うど……」といえば、たちまちこのはやし歌を浴びせられる。かくれて告げ口することを極端に、卑怯者とした薩摩では、こうした「からかい歌」が郷中教育の一端として行われたのかも知れない。二行目の「ゆーどが頭」というのは、「入道が頭」に掛けているものと思われる。

「その他の遊び歌」

「今夜の晩は、オトロシ晩じゃ

鬼神か、面か

出つくそな晩じゃ ワッ!

子供たちは、一団となつて暗がりのところまで行くあいだ、この歌をうたつて行く。そして、ものかげの暗いところで、「ワアッ」と叫んで別れ、別れに走る。集団の中では、みんなという安心で歌っていたものが、急に、別れ別れになつて心細くなり、鬼神（見たこともない恐ろしい魔物）が、面（能面のようなお化け）に襲われる恐怖感に、逃げ走るのである。

「タケンコ、スミン

アブチャ ニツチャ カン

「タケンコ、 酔味噌

一銭ガチ 三ツ

オマケテ 四ツ

「雪が コン コン
お寺の サンシユンノ木
ヒツカカッテ コン コン
ワイが ワイも
オイワイモ ワイワイ言ナユでよ
オイモ ワイモ
ワイワイモ ワイワイ言ナユとよ
言葉合戦とも、また擲や揄ゆする遊び言葉とも言われている。
「いつまめ ほまめ ほが 六つ なるだ
でくっどんのおかげで よかもん もろた
あんな こつてな そこんさつのこしま
その上 ぢがのつて 引け
何人かの、子が、それぞれ右手の拳こぶしをグウの形で

「雪が コン コン

「霰あられが コン コン

お寺の サンシユンノ木

ヒツカカッテ コン コン

「ワイが ワイも

オイワイモ ワイワイ言ナユでよ

オイモ ワイモ

ワイワイモ ワイワイ言ナユとよ

言葉合戦とも、また擲や揄ゆする遊び言葉とも言われている。

「いつまめ ほまめ ほが 六つ なるだ

でくっどんのおかげで よかもん もろた

あんな こつてな そこんさつのこしま

その上 ぢがのつて 引け

何人かの、子が、それぞれ右手の拳こぶしをグウの形で

差し出す。丸く合わせて、右の歌をうたいながら、数えてゆく。「引け」の順に当たったものは、順々に引き退って、最後に残ったものが勝ち、またはゲームの鬼になる遊びである。

ㄨ ボイ ボイ 止マレ

竹ンシンヌ クワスツデ

竹ぼうきをもってトンボを追いかける子供たちの姿をもう見かけることはない。竹笹の芯しんを引きぬいて捕えたボイ（トンボ）に食わせると、コメボイ（体が銀色で頭がくろい）も、アワボイ（黄色としまもよう）も、もりもりと笹の芯をかじったものである。

ㄨ 泣こかい、飛ほかい

泣こよか、ひっ飛べ

土手の上など、高いところから、飛びおりの遊びである。薩摩の気風を、育てた遊びとも言われる。

ㄨ 正月が 近づく 子どんな よろこぶ

親は心配する ボチは タンタン

ㄨ ゆっさんこ ゆっさんこ

ゆすぐちや ひっ落れっ

ゆっさんこ ゆっさんこ

油こけ いたや

油びんぬ すっぐわった

おとちゃんに 言たや

ヒヨコシで コッチャリン

おっかはんに ゆたや

モノサシで コッチャリン

木の枝にのって、ゆっさゆっさ、ゆする遊びで、年長の者が上にのってゆすってみせると、下の子どもたちもそれに合わせて、うたい、ゆすって遊ぶ。切り倒した木の枝で、地上でもよくゆさぶり、はやして遊ぶ。

ㄨ せっくんぼ せっくんぼ

中ん奴やうちゃ 押し出せ

せっくんぼ せっくんぼ

押されて 泣くな

日向ぼっこは、子供たちの遊びでもある。活動的な子供たちにとって、寒ければ、寒いほど動く運動が必要である。校舎の壁によりかかって日向

ほっこをする子供たちは、両方から寄ってたかって押し合いをする。そして体をぬくめ合い、信頼と練磨と、抵抗を遊びの中から肌で学びとってゆくのである。

羽釜が すいばっつ カーブッタ

今夜も カライモの 夕飯か

「羽釜」は中腹に「つば」のある釜、

「すいばっ」はすりばちのこと。さつまの地方郷土や、大方の農民のくらしは貧しかった。年配の方なら記憶にあらうかと思うが、羽釜にすりばちをかぶせてカライモをゆでる。それが一家の夕食なのである。「今夜も」とあるから、それが常食なのであらうか。表面は、ふざけても、見方によっては、深刻な社会問題（風刺や、自嘲）を込めた歌である。

いろいろの片隅に竹つっぽ（竹筒）がおいてあって、その竹つっぽにカライモの皮が一ぱいになるまで、カライモを食べる。それから米と粟の半々の飯が配られたと語る古老もいる。ぜいたくに馴れた今の世代では、およそ及びもつかないものが

ある。子供の友達が「遊びに行っど」と呼びにくる。「まいとっ待ちやい、いまカライモ食じゃで」家の中では、あわてた父親が「飯食うじゃち、言わんか」「ウン、カライモ食うじゃっどん、メシ食うじゃッ」と言ったという、笑えない小ばなしがある。悲しいユーモアである。「武士は食わねど高ようじ」とも言う。一刀両断の太刀のなかった「さつまの自顕流」はこうした風土から生まれたのかも知れない。

四 溝辺の伝説と民話

(一) 十三塚原

遠い遠いむかしのことであった。

鹿児島県の国分八幡と、大分の宇佐八幡とは、九州で二、二を争うほど、それはそれは、大きな権力を持った八幡さまだった。神様でも、名誉欲はあるものとみえてのう。喧嘩をおっはじめた。喧嘩のもとといえば、どっちが、正八幡であるか、ということであったそうなの。

「宇佐八幡こそ、正八幡でござるぞ。そのむかし、和

け清麻呂が、遠く都から神託をうけたまわりに来られたのは、国分八幡なぞではござらぬ。わが、宇佐八幡宮でござったわ。この事実こそ宇佐八幡の正八幡であるという、かくれもなき証拠でござるわ」と、言えば、国分八幡のほうも、

「何を言われる。よくよく耳をほじくって、聞かれよ。そもそも、わが国分八幡宮は、神武天皇の勸請かんじようによってヒコホデミノミコトを祭り申したのが、そのはじめてでござるわ。清麻呂をもち出して正八幡などと申すは、無学文盲の徒の申すべきことよ」と負けてはおらん。

なにしろ、むかしはなあ。屁理屈へりくつということにかけては、坊主と神主の専売特許みたいなもんだったでよ。おたがいに、たらたらと屁理屈を、七年間も並べおった。屁理屈を並べあった時に、必ず勝つという原理があるわ。屁理屈にとっては、正しいとか、正しくないとか、まあ、そんなものは、無関係よ。屁理屈のうまいほうが、必ず勝つのさ。

ところが屁理屈にかけては両方とも名人だったとみえて、七年間も争っても、勝負がつかなんだ。宇佐八幡の

方では、代々、宇佐が正八幡だと、語りつがれてきた。だから、宇佐八幡宮の神官たちは、心からそうだと信じきっておった。

「うそ八百を並べたて、屁理屈でごまかそうとする国分め、すておけぬわ」と宇佐がわは、たいそうもなく腹をたておった。「どの

ような手段を用いてもよろしい。につき国分が、以後、うそ八百を並べたてることのできないようにしていれ」

と、心ぎいた一四名の神官を選んで国分にたたせた。

「こりゃまあ、えらい役目をひきうけてしもうたもんだわ。どうしたらよかろうか」と、考えながら、旅をつづけたが、よい考えも浮かばぬままに、国分についてしもうた。

国分についたのは夕方じゃった。一四人の者は、畑のあぜ道に腰をおろして休んでおった。ちようどな一。ナタネのとり入れのすんだあとで、百姓衆が、ナタネをとった後の葉や茎を、畑のまん中に山と積んで燃やしておった。その、枯れた葉や茎の燃えやすいこと、ちよいと火種をつけると、あつという間に、めらめらと大きく燃

え上がるのだった。

しだい、しだいに夕やみのせまってゆく国分平野のあちこちで、そういう火が赤々と燃えておった。一人の者は、国分たちに負わされた、困難な仕事のこととも忘れて、「美しいなー」と思いながらながめておった。が一人の神官が急に、

「おおっ」

と言って、ひざをぼんとたたいた。

「どうしたのじゃ」

「あいつさ。そら、あの枯れたナタネの葉と莖さ」

これだけのことで、あとの一三人の者にも、この神官が何を考えついたか、わかったようじゃった。

「うん、なるほど、あいつを使うか。よい考えじゃ」と、たがいに、うなずきあった。

その日のうちに、一人の者たちは、仕事にかかったのじゃ。

里の者も、国分八幡の神官たちも、ぐっすりと寝こんでる真夜中になあ、一四人のものたちは、ナタネの枯れた葉や莖を集めて来て、神殿の床下に、大きく盛り上げるのじゃった。神社の大きな建物という建物の床下に、

ことごとく、そうやったのだぞい。一人のものは、手分けをして、そいつに、いちどきに、火をつけたんじゃ。

一人の者は、裏山に身をひそめて、下のようすをうかがっておった。しばらくすると「わあー」という叫び声がおこった。何十人、何百人とも知れぬ、多勢の叫び声だ。

「おお、こりゃあ。大火事にならぬうちに、消し止められはしないかな」

と一四人の者は、心配しておった。

やがて、ばちばちと、もののはせる音がして、ごうという音とともに、火の手が大きく上がった。大きな建物という建物から、一どきに、火の手があがったのじゃ。あたり一面、まっかになり、天もこがさんばかりの勢いじゃった。

「神社が、まる焼けになってしまえば、正統も、くそもない。黒を白といいくるめようとした者どもへの神罰じゃ」

と考えながら、燃えさかる火のまわりを、右往左往して、とびまわる神官や里人をながめておった。

と突然、東の空が、ピカッと光った。目もくらむばか

りに光った。同時に、百の雷が、一度に落ちたような音がした。どえらく、でっかい音だ。思わず、地面に、からだを、びたっと伏せた。おそるおそる顔を上げてみるとなあ。燃えさかるほのほの真中に、まっ黒い煙のようなものが、まんまるい形で、ぼーんと、浮かんでいた。

「こらまあ、どうしたことかい」

目をこらして、まんまるい煙の玉のようなものを、見つめてるとなあ。その玉は、しだいに崩れていって、ほのほの中に、字の形が現れた。

正八幡宮

という文字が、もえさかるほのほの中に、はっきりと現れたのじゃ。一人の者は、驚いたのなんのって……。

国分八幡が、うそいつはりもなく正八幡だったのじゃ

「こりやまあえらいこっちゃ。急いで帰って、宇佐がわに伝えねば……」

と夢中で山をかけのぼった。

行けども、行けども、つきることがない。

と思われるほど、大きな台地じゃった。走っても、走っても台地はつきない。一人は、へとへとに疲れてしまった。

マガタマの大木があったので、その下で、ひと休みしておると、みりみりと、音がして、突然、一人の者の上に倒れかかった。あつという間の出来事だったわ。

一三人の者は、大木の下敷きになって、息たえてしもうた。が、一人だけ生き残った。それというのは、あまりに疲れておったので、大木の下の窪地くぼになつてゐるところに、大の字になつて、ひっくりかえつていたからじゃ。長承元年（一一三二）の出来事だ。

その後、里人が、一三人の死骸がを見つけ、あわれに思つて、ほうむつてやり、その上に土を盛り上げて一三の塚をつくつてやった。それ以来、この高原を「十三塚原」というようになったのさ。

昭和十二年に、崎森の青年団が、塚のあつたあたりに、一三基の石碑を建てたのだがなあ。このあたりも、すっかりひらけてしまつて、畑になつたり、でっかい飛行場ができたり、家もたてこんでなあ。

いまは、一三番目の石碑一基と、案内板が、ぼつんとたつてゐるきりよ。

『鹿兒島の伝説』

(棕 鳩十・有馬英子著)より集録

(二) 民話

次郎吉さんのおみやげ

「後^{うしろ}原の 次郎吉どんには

音せん ことよ

ドントコ ドンドコ」

夢のような、うつつのような囃^{はやし}の遠なりが聞こえて、

次郎吉さんはふと、きき耳をたてました。

「たしかに鳴っている」……太鼓のような音、三味線のような音、そして人のざわめきも、お酒もりの時のそのままです。次郎吉さんは目をつむったまま、静かに両手をのびして、大きくあくびをしました。

「サラッ、サラッ」手ざわりが何か変です。あわてて目を開いてみて、驚きました。

おやおや、原っぱに寝ていたのです。麓の家のお祝いごとによばれて、ごちそうになり、帰りのおみやげを腰にぶらさげたまでは、覚えていますが、はて!!どこをどう歩いてきたのか、さっぱり思い出せません。さては、うわさに高い、高木原のゲンゴゼ狐^{ウツネ}に、化かされて道を迷い、歩きつかれてここまで来て、寝こんでしまっ

たらしいのです。

次郎吉さんは急に小便がしたくなりました。ごそごそと起き上ってみると、まわりは素晴らしいお月夜です。

すぐ前の久木田岡の上に、まん丸いお月さまが輝いて、あたり一面は、ほんとに昼のような明るさです。森も草原もぬれたように、しっとり青白い光をふくんで広がっていました。次郎吉さんは、月に向かって、気持よく、ながいながい小便をしました。

その時、次郎吉さんは、穂麦畑の向こうに、何か変なものがあるのに気づきました。人が向こうむきに、しゃがんでいるような、かっこうですが、ときどき「チャッ、チャッ、」とこちらを振り向いています。その時の目の光が、きらきらと氷のように冷めたく光るのです。

「うわさの狐だな」

と思ったとたん、一べんに、のどがからからになって、息が止ったような気がしました。胸のどろろきが、ドキン、ドキン、と耳の奥で鳴っています。

急に麓の家を出る時もらった腰の「おみやげ」のことが、思い出されました。体を動かさしないで、そおっと、腰に手を回してみました。「ないっ」たしかに腰にくく

りつけたはずの、おみやげの煮しめがなくなっています。

「しまった、やられた」そう気付いたとたん、むらむらと狐が、憎くなりました。

「よし、こらしめてやろう。二度と人間を化かさないように」、そう思いきめると、リンリンと勇気が湧いてきました。

やにわに、近くにあった棒切れをひろうと、狐にむかって走りだしました。驚いたのは狐です。しゃにむに追ってくる次郎吉さんの後に、ただもう無我夢中で、方角も分らずに逃げ出しました。

野を越え、径をこえ、畑をふみきり、ふみ切り、息もつかせず追跡が続きます。狐は面くらってしまいました。こんなに、しつこく追って来るとは思わなかったのです。

高木原から、水尻原まで、かけっこの得意な次郎吉さんも、七回半まわった時には、もう息が、きれるのではないかと思うほどでした。

でも、とうとう狐の方が、悲鳴をあげて、高土手のある大きな茶園の中に、首を突こんでしまいました。夜露

にぬれた、大きな狐の尻尾が、ふさふさと月に照らされて光っていました。

次郎吉さんは、土手に片足をかけて、両手で尻尾をつかんで「よいこらしよ、よいこらしよ」

と力一ばい引張りしました。何度も、なんども、引っ張りました。

狐は茶園の根元にしがみついて、死んでも離さないぞ／＼と頑張っていました。

「今度こそ」

と次郎吉さんは、顔を真赤にして、引っ張りました。その時「ゴボツ」と音がして、次郎吉さんは尻尾を、つかんだまま、ころころと、下の畑にころがり落ちました。尻尾が、ぬけてしまったのです。

「うーん」

次郎吉さんは、落ちた拍子に、畔あぜで頭を打ってそのまま、目をまわしてしまいました。

涼しい朝の風が、穂麦畑を渡るころ、次郎吉さんは、やっと目がさめました。もう、そこらあたりには、狐のすがたは、みえませんでした。

次郎吉さんは、朝露に光る狐の大きな尻尾を、得意そ

うに、腰にぶらさげて、ゆうゆうと家に帰りました。

『溝辺の民話』

(青雨・岩元深著) より集録

語り継ぐ海幸・山幸の物語り夕日語々とふところに溜め

岩元 右京

溝辺に伝わる海幸・山幸の神話は、二つの玉の物語りとしてあまりにも有名である。兄から借りた釣針をなくした山幸火遠理命(はりのみこと)(彦火火出見尊)はその縁で龍宮の豊玉姫をまぐわ婚せしめき。と『古事記』に記されている。

五 農業開拓史の中から(横頭)

人間はとかく、生まれた土地に定着し、生涯を送るのが普通である。町内にはたくさん集落があるが、個々の先祖を知るとき、意外と町外からの移住者が多いことに驚く。藩政時代から現在にかけて、人間の移住は、政策的に、また個人的な理由から頻繁に行われている。古老の言によると、町内戸数のおよそ半分は移住者の子孫、それ以上の三分の二くらいは移住者の子孫説に分か

れる。確かに各集落には町外からの移住者の子孫が何軒もある。移住者は大字麓方面に多く、富農も多い。その中で最も特異な集落が横頭部落である。

横頭部落は藩政時代、一軒の移住者、重森新之丞・妻ツルの子孫から形成された親類の集落で、しかも農業専従の集いである。重森新之丞の没年は、長男吉太郎の戸籍簿に「明治四年九月十五日相統」と記載されており、墓石には「明治四年十一月二十九日死亡 六十七歳」とあり、月日に若干の不突合があるものの、没年は明治四年は確実である。

これより起算すると、生まれたのは西暦一八〇四年、すなわち文化元年で、生後八代の陛下にお仕えたことになる。明治四年ごろの歴史をよも繙くと、藩政時代から、明治維新の大改革が行われる初期である。町内においては、明治二年溝辺郷校創立、また当時の郷政は第一九代地頭肝付次右衛門である。そして明治九年溝辺郷校は溝辺小学校と改称されている。国内的には、明治二年版籍奉還、翌三年には平民に名字の称を許す。翌四年になると廢藩置県、戸籍法制定、明治五年学制公布、徴兵令公布、近衛兵の設置、鎮台条令布告。町内では、第二〇代

権原与右衛門地頭から初代岩元七郎村長が誕生するなど、政治的にも社会的にも正に日本の黎明の時代に重森新之丞は没している。天保の初期から中期に妻ツルとの間に四男三女が生まれ、この四人の息子達の血族による直系子孫から横頭部落は構成され、現在三五戸、一四一名の集いとなっている。

横頭部落は、その昔、飲料水に乏しく弘法大師が、お恵みの水を出して下さったという伝説がある。場所はこの部落から橋之口部落に通ずる宮田川にかかる石橋の西側で、割石が四角に積んであり、豊富な地下水が一年中あふれ出ているのが、その水といわれている。

重森新之丞は、こうした縁起のよい地に、日置郡養母村（現在東市来町養母）から横頭部落現在の重森市太方の北裏に生活の根拠を構え、荒野に生きる男として水尻原の開拓にかかる。移住年号、年齢については、残念ながら定かでない。息子四人はすべて町内から嫁をもらっていることからして、二〇歳前後であることは確かである。

当時の移住開拓については、資金の援助はなく、健全な体が資産で、しかも人力による山鉾、なた、のこぎり

などが唯一の開拓機で、重労働に質素な食住に耐えつつも、家族の一致協力もあって、初代にして富農となり、四人の息子をそれぞれ独立させる。

二代目長男重森吉太郎は、宮原宗右衛門の長女カメと結婚して現在の重森市太の屋敷に分家し、運勢に乗り土蔵倉を門口の左崖下に造り、年末になると二斗五升入りの吠が、二五〇俵も蔵に積まれ、年末にはにぎわいを呈した。また、蔵の北よりに約一五〇坪のトンネルを掘り、湧水を引き出し、飲用雑用に使い、残りは庭に池を造り繁栄を極めた。

吉太郎は子供に恵まれず、一子八太郎のみである。

三代目の八太郎は、水尻部落中山サトと結婚し、三人の息子、八人の女子の子宝に恵まれた。長男重森磯右衛門、二男重森清、三男重森末吉である。

四代目の重森磯右衛門は、高槻市で高等学校教諭を定年退職し現在書道塾を開いている重森勲や、甲府地方検察庁検事を経歴し今は亡き重森幸雄ら、優秀な子息を送り出している。娘の長女堅山ユキエはカナダに移住し、今も健在である。八太郎の娘達はほとんど町内に嫁ぐ。四女カメは石峯末永完司、五女チヨマツは植木末五

郎と結婚し、嫁入先の婿も兄弟とめずらしい縁組。八女スエマツは麓玉利徳重精助と結婚し、いずれも町の要職や県教職に奉職された方々の賢妻である。

重森新之丞の居宅は大きな曲屋造りだが、老朽化し放置してあった。そのころ鹿児島市は勝目市長時代で、同市の教育長椎原東の発想で、土族の有名な建物は文化財として保存されているが、平民の建物も保存したいという意向を持っていた。その時一緒になって物色した五代目満塩政法（建築業者で、現在東京都国分寺市西元町在住）が、椎原教育長を伴って先祖の曲屋を見せたところ、教育長も大変気に入り、曲屋の一部分すなわち土間、イロリ、膳柵ぜんさくの部分を一万五〇〇〇〇円で取得、現在鹿児島市立美術館に保存されている。

新之丞の次男重森新太郎は、満塩三右衛門を養父として、満塩姓となり、木佐貫太郎左衛門の長女ケサと結婚し、現在の満塩三郎の宅地北裏に分家し、長男市太郎、次男佐太郎、三男四郎、四男新之十、五男助市のほか、長女のチヨは有川の山村市郎に、次女のハルは水尻中山三太郎にと、いずれも町内に嫁ぐ。息子五人は共に父・祖父の遺志を継ぎ、農魂たくましく穀を振るい、百姓一途

に励む。特に五男助市は五男七女の子宝に恵まれ、往時からして、子育てには苦労が多かった。

新之丞の三男重森喜太郎は、末重仲兵衛を養父として、末重姓となり、妻ヲトマツを迎え、兄新太郎の近くに独立し、長男三太郎（後、改名して田となる）が後を継ぐ。次男市郎は中山長次郎家の養子となる。長女のカメは従兄に当たる重森袈裟市と、三女ツルガメは従兄に当たる重森与次郎とそれぞれ結婚し、二女アグリは、嘉例川大山与次郎と結婚し、親族の輪を広げる。末重喜太郎は幸運に恵まれ、資産を拡大しつつ高利貸業を始め、息子の田の時代まで続く。

藩政時代、西郷隆盛がよく狩猟に来て、休憩や、雨宿りしていた。その置き土産として青銅製の直径約一五釐、厚さ約五釐、真ん中に二・七釐の四角の穴があり、表面には「和同開珎」の四文字が記され、裏面には、左右に大黒様の像が一体ずつあり、真ん中の四角い穴をはさんで「大福」の二文字が記されている。末重家は家宝として拝み奉っている。これからしても末重喜太郎の繁栄ぶりが察せられるが、いかに西郷隆盛が庶民的で偉い軍人であり、政治家であったことがうかがえる。『百科辞

典』によると、「和同開珎」は、和銅一年（七〇八）に発行された日本最古の銭とあり、銅銭と銀銭の二種類あり、各地の鑄銭司を鑄られ、周防、山城などに遺跡がある。唐の開元通宝をまね円形で四角の穴をもつ。「珎」は珍の異字であるが、宝の略字とみて「わどうかいほう」と読む——とある。

末重田が、ある日、債権取り立ての用事で、ワラジばかりでツツラかごを背負い、鹿児島市のある旅館に宿泊をしたのんだところ、身なりを見て断わられた。ところが田が経営者と呼んでもらったところ、あるじは頭を下げて奥座敷に案内、歓待したという実話もある。

新之丞の四男重森熊助は、石峯有村金左衛門の次女ツルと結婚し、農業に専念するかたわら、長男袈裟市、次男権太郎、三男与四郎、四男太郎、長女キク、次女ヨシの六人の子供に恵まれる。長男、長女、三男はともにいとこ同士で結ばれ、次男権太郎は石峯有村市之丞の次女アサと、四男太郎は鍋高田市太郎の長女と、次女ヨシは石峯有村市之助とそれぞれ結婚しているが、石峯方面との交流が多くなっている。

熊助の姉キングメは父母の出身地、日置郡東市来村養

母の田代次郎左衛門と結婚しているが、秀才で子供には教育熱心な賢母であった。息子達は旧陸軍大佐・県議会議員・初代川内市教育長の田代誠道をはじめ優秀な人材に育っており、サラリーマンも多く、横頭の農業専従に比べ、第二種兼業者がほとんどで対照的である。重森新之丞没年から一六年、東市来町養母との交流はなく、二代目長女キングメ死亡の時、溝辺を代表して、重森権太郎、重森清、末重田が葬祭に参加しており、また三代目重森八太郎の妻サトが昭和十四年に亡くなったとき、養母から何人かの代表者が葬祭に参列されたこと以外、往来は絶えていた。

日中事変、太平洋戦争に悲惨な体験をし、戦後の苦難を乗り越え平和な社会になった昭和四十六年三月、初代重森新之丞を慕う集落は東市来町養母の血族にも呼びかけ、一〇〇回忌法事を部落公民館で催したところ、養母から約三〇名など参集者は二〇〇名にも達し、照明寺藤谷九草住職は感激され、過去にまた今後にもない法事であると感じられた。法要の最後に四代目重森貞雄氏は、常日ごろ感謝していた心境を先祖にご報告、今日あるを喜び「今後は親類一同結束を強め繁栄を約束し、ご恩に

報いたい。先祖の霊よ安心して見守って下さい」と誓約した。

この催しは南日本新聞にも、「開拓魂を継ごう、先祖の百回忌に親族のつどい、繁栄へ結束を固める」と大きく報じられ、『南風録』にも、「老いて幹太く、そびえたクスが燃えるような若葉を太陽に向かって広げる姿は美しい」と、この集いの意欲、繁栄ぶりを表現している。

この祭事を契機に、養母から記念樹犬巻を受け、重森新之丞一〇〇回忌記念樹碑を建立、先祖の業績を称え、また養母とのつながりを深めることにした。

この特異な集落の名は県下に広がり、五十二年十一月にはフジテレビの制作で、墓地清掃、部落有林の管理、部落運動会など年中行事の催しを「我等一族」というタイトルで南日本放送から放映されるなど、名声を博し、溝辺町の名誉にもなった。

また五十五年には、念願の水尻原、京ノ峯台地の土地基盤整備事業も完了し、新たな心境で農業に専念することになった。さらに五十七年四月には、集落総意により、展望のよい京ノ峯台地に納骨堂三五基を建立、先祖の霊安らけく納骨した。なかでも先祖の納骨堂として、

墓地の中央に初代から二代目の遺骨が納められ、集落で墓守りをし、いつも花と線香が絶えたことがなく、この部落を象徴する代表ともいえる。朝日から夕日までを受けるこの台地は、全く瑞穂の台地と称してもよく、初代新之丞の子孫で独占したようなものである。

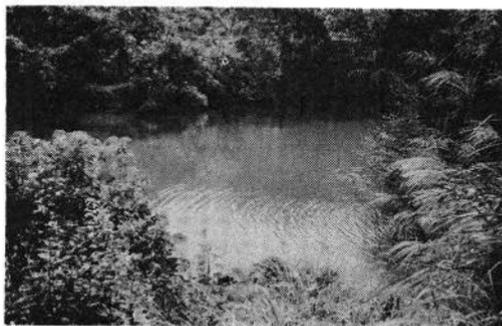
現在三五世帯のうち四代目経営者は七戸、五代目二五戸、六代目三戸で、五代目が七一割、年齢にして二二歳から六〇歳までの経営者層となっている。経営者年齢別では、二〇代三戸、三〇代八戸、四〇代六戸、五〇代一三戸、六〇代二戸、七〇代三戸で、五〇代の三七・一割が最も多く、以下若年の経営者が多いことでも、いかに後継者の農業意欲が強いかがよく分かる。一世帯当たり人員も四名で、町の平均二・七七名(六十年国調)をはるかに上回る。鹿兒島空港が開港して兼業農家も増えたものの、八戸で全体の二三割である。

また農業の実態は、水田面積七四四㌥(戸当たり二一㌥)、畑四四三八㌥(戸当たり一二七㌥)肉用牛(成牛)一四九頭、馬一頭、計一五〇頭(戸当たり四・三頭)を飼育し、多頭飼育二〇頭の経営者が二人もおり、すべてが町の平均を上回り、溝辺町を代表する農家群である。

作物は、水稲、野菜、肉用牛、茶などを組み合わせた複合経営で、農業経営の不安定な今日ではあるが、前途に自信をもって意欲的に精出すこの部落は頼もしい限りである。

ちなみにこの部落の親等は、二代目満塩新太郎の子孫一五戸、同二代目末重喜太郎の子孫一戸、同二代目重森熊助の子孫一九戸が切磋琢磨し、発展している集落である。

六 上十一月田池由来



上十一月田池の全景（これの堤一つ左下手に下十一月田池がある）

竹子極楽地内の

十一月田池は、上

・下二つある。郷

土誌初版「第三部

歴史編第三章第三

節」に二四の溜池

の来歴が一覧表で

抄記されている。

そのほとんどは昭

和初期から藩政時

代の建立となって

いる中で、この上

十一月田池のみが太平洋戦争の真ただ中から末期にかけてつくられたものである。文字どおり軍民一体の人海作戦で建立されたもので、獣道をよじ上って池畔に立つと、小さな記念碑が雑草に埋もれて三年八月を要した難工事の実態を物語っているかのようである。敗色濃い戦

争末期飢餓状態におかれた国民の食糧事情と、統後の深刻な苦悩の姿を目のあたりに見る思いがして、いままさらながら戦争の苛酷さと悲惨さが思われるのである。

今ここに郷土誌統編の発刊に当たり、この小さな溜池は太平洋戦争の国策としての落とし子であり、銃後が築いた歴史的な遺産として、記念碑文の全文を掲げ、由来を明らかにしておきたい。

〔前面〕 「溜池石碑」

〔裏面〕

設計工事費 金二万六千六百六十一円也(県補助金)

総額金八万二千六百六十一円也

工事着手昭和十八年一月十四日始

昭和二十一年八月二十五日終了

水量 田地 七町歩使用

発起人、委員長 総監督 岩元巳之助

発起人 願人委員 佐藤 芳直

委員、 竹下源右エ門、下園成蔵、蔵園 清

神田甚左エ門、長野 薫、西野清助

榎木園太兵衛、長野光男

此の溜池は昭和十八年県耕地課木佐木課長、津田技手設計に依り、補助金二万六千六百六十一円にて当時人夫の一日賃金

男一円〇〇女一円三十銭、戦争により人手不足に付当時の

(欠産不明)

溝辺村長植木末五郎、助役山崎虎熊氏に願ひ、村民勤労奉仕婦人会、青年団、教員県農兵隊日置郡出身野村中隊長以下一個中隊人員一四〇人にて二ヶ月奉仕願ひ其後北海道兵三六〇人が奉仕致し、昭和二十一年八月二十五日完成致しました

農兵隊出動日数八千八百日

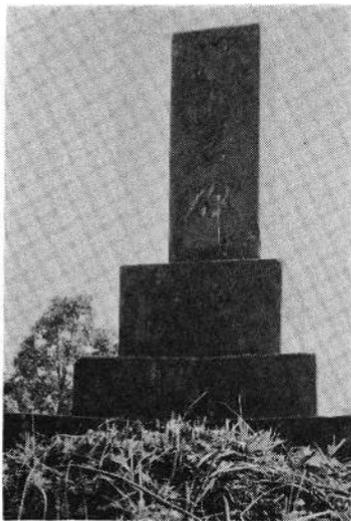
北海道兵隊出動三百六十日

勤労奉仕組合、婦人会、青年団二百五十日

三校教員奉仕二十五日

一般人夫一万三千五百日

計二万二千九百三十五日



上十一月田池記念碑
(昭和21年8月25日建立)

七 米価のうつりかわり

年代	米価	備考
明1	一円六九銭	
2	三円四三銭	
3	一円八七銭	
4	一円一二銭	
5	八〇銭	
6	一円二〇銭	地租改正
7	一円八七銭	
8	二円五銭	
9	一円一八銭	
10	一円三四銭	西南の役
11	一円九二銭	
12	二円六四銭	
13	四円八〇銭	

14	三円二八銭	
15	二円八銭	日本銀行創立
16	一円二五銭	
17	一円八四銭	
18	一円七三銭	内閣制度始まる 伊藤内閣
19	一円五五銭	
20	一円四六銭	
21	一円四二銭	町村制施行 黒田内閣
22	二円	山県内閣
23	二円	
24	三円六四銭	松方内閣
25	二円二八銭	伊藤内閣
26	三円六六銭	
27	三円六六銭	日清戦争
28	四円	
29	五円七二銭	松方内閣
30	四円一六銭	伊藤内閣
31	三円二八銭	大隈内閣 山県内閣

4	3	2	大 1	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	明 32	
四円三七銭	七円二八銭	八円三二銭	八円三二銭	六円一六銭	五円三六銭	四円	四円九二銭	四円七二銭	五円二八銭	五円二八銭	四円三六銭	四円三六銭	四円九六銭	三円七六銭	三円七六銭	四円	
	大隈内閣	山本内閣	桂内閣	西園寺内閣		米検査制度	桂内閣		西園寺内閣		日露戦争			桂内閣	伊藤内閣		
8	7	6	5	4	3	2	昭 1	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
一〇円八〇銭	八円二〇銭	六円五〇銭	六円二八銭	一〇円四〇銭	一〇円六〇銭	一〇円八五銭	一二円七〇銭	一三円六〇銭	一五円五〇銭	一〇円四〇銭	一〇円二〇銭	一四円二〇銭	二〇円	一〇円六〇銭	八円四八銭	六円	五円五二銭
	斎藤内閣	若槻内閣		浜口内閣		田中内閣	若槻内閣	加藤内閣	清浦内閣	東京大震災	山本内閣	高橋内閣	総人口 五五〇〇万人	戦争、米騒動	原内閣		寺内内閣
	満州事変	犬養内閣															

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	昭9
二三六円七二銭	一一〇円三〇銭	二五円	二五円	一九円六〇銭	一九円六〇銭	一六円三〇銭	一六円三五銭	一三円四二銭	一二円九〇銭	一一円八〇銭	一〇円九〇銭	一四円八〇銭
吉田内閣 片山内閣	鈴木内閣 終戦	小磯内閣		食糧管理法制定 (一七・二・二二)	東条内閣 太平洋戦争	米内内閣 近衛内閣	平沼内閣 阿部内閣		林内閣 近衛内閣	広田内閣		岡田内閣